第二部　中共側資料

エドガー・スノウ著 宇佐美誠次郎訳『新版・中国の赤い星』

筑摩叢書（29）より抄録（見出しは葛西がつけた）

『蘆溝橋』への道

〔葛西注〕

著者エドガー・スノウは戦後〝アカ狩り〟にあって米国国籍を剝奪され、一九七二年二月、亡命先のスイスの一寒村――エバン村で淋しく世を去ったが、著書『中国の赤い星』は信憑性の高いもので（政治感覚の面には問題があるとしても）、蘆溝橋事件が中国共産党の犯行であることを逆の面から証明するものである。つまり、当時、日中戦争を一番切実に欲していたのは中国共産党であったことが、何よりもよく記述されているからである。

読者は『日本帝国主義』と『不法支那軍』という二つのお化けばかりに気をとられ、全く迂闊にも『中国共産党』という真犯人が瀕死の瀬戸際から逃れるためどんな動きかたをしたか、その客観的観察を怠ったことに気づかれるであろう。戦争の必然性が『帝国主義』側のみに存在し、『共産主義』側には存在しなかったとする先入観は、中学生的思考の所産にほかならず、もっと手厳しくいうなら共産主義宣伝の虜になり下った現象とみられよう。そんなことでは戦争を正確に知ることができず、また戦争を確実に予防する役にもたたないであろう。ましてや、止むを得ず防戦する立場にたたされた場合も『勝利』の参考と

はなり得ないであろう。

ここに抄録した部分は、裏を返せば、中国共産党の恐るべき『戦略戦術』の一端ともいえるであろう。

◇

〔20頁〜21頁〕 一九三六・六　西安

私は着くとすぐに陝西省綏靖主任楊虎城将軍を訪問に出かけた。楊将軍は数年前までは赤軍に支配されないこの陝西地方の独裁者であった。彼はもとを正せば土匪で、多くの中国の有能な領袖が官職を得るルートによって権力者となり、同じ方法で彼はおきまりの財産をためたといわれる。けれども最近彼はその権力を西北の他の数人の紳士と分たねばならなくなった。というのは一九三五年に「若い元帥」たる満洲の支配者であった張学良がその軍隊を陝西に入れ、この地方における最高の赤匪討伐者——国民政府勦匪軍副司令として西安府に官署を設けたからである。そして若い元帥を監視するために蔣介石総司令の番頭たる邵力子がやってきた。邵は陝西省政府主席であった。

これらの人々——なお他の人々——の間に微妙な勢力均衡が維持された。彼らすべての背後で糸を引いていたのは、勢い当たるべからざる蔣介石その人であって、荒れまわるソビエト民主政治（葛西注＝中共）のみならず、楊虎城と張学良の軍隊をも、各軍が相互に相手を絶滅し合うようけしかけるという単純な方法で一掃しようとつとめた。すばらしい政治軍事劇の三幕——そのおもな策略の成功を蔣は明らかに信じていたが——は、ただ彼の胸のうちにあるのみであった。そしてこの打算上の誤謬、目的の追求に当たってやや性急すぎたこと、彼らの敵は愚鈍であると見くびりすぎたこと、これらの誤謬のために数か月ののちに蔣介石は三人の手（葛西注＝中共、張学良、楊虎城）で西安府で捕虜となることになったのだ。

〔24頁〜28頁〕 張学良と東北軍

誰でも知っているように、一九三一年までは張学良は人気があり、賭博好きな、寛容な、近代的で、ゴルフをやりアヘンを吸うという満洲の三千万人民の気まぐれな軍閥独裁者であり、彼が土匪出身の父張作霖から受けついだ官職を南京の国民政府から確認され、また南京政府は彼に中国陸軍副司令の称号を与えたのである。一九三一年九月、日本は東北の征服に着手しはじめ、張の失脚がはじまった。侵略が開始されたとき、張は北京の城壁下の協和病院で腸チフスの回復期にあり、この危機に単独であたる状態になかった。彼は南京に懇願し、彼の血盟の「長兄」蔣介石総司令にすがりついた。だが、どうしても戦争を避けようと望んだ蔣介石は、無抵抗、撤退、国際連盟への依頼を勧告した。病身で若く（彼は三十三歳にすぎなかった）無経験の上に、堕落した無能な家の子郎党に取りかこまれた張学良は、蔣の勧告と南京の命令を受け入れた。その結果、彼は故国の満洲をその防禦にほとんど一発の弾丸も打たずに失ってしまい、一方その犠牲で蔣介石は彼自身の動揺する南京政府を維持し、赤軍に対する勦滅戦を開始した。（葛西注＝事実は「開始した」のではなく、一九三〇年十二月の第一回、十万人、一九三一年五月の第二回、二十万人、一九三一年七月から十月まで三十万人の兵力を投入した勦共戦が、満洲事変勃発とともにひと先ず終わっている。再開された第四回目は一九三三年四月より十二月まで、投入兵力二十五万人＝いずれも同書134頁＝であるから、「開始した」は著者エドガー・

スノウの錯覚である）

これが中国の東北軍（Dung bei と発音する）と呼ばれた満洲の軍隊が、大挙して中国本部の長城の南へと移動した経緯である。日本が熱河に侵入したとき、同じことが起こった。そのとき張学良は病院にはいなかったが、病院にいた方がよかったくらいであった。南京は彼になんら援軍を送らず、なんら防衛の準備もしなかった。蔣介石は戦争を避けるために熱河が日本の手に陥るのを傍観するだけで、そのとおりになった。それなのに張学良は非難を受け、激怒した人民をなだめるために、誰かが辞職しなければならないときに、おとなしく山羊の役割を演じた。犠牲になった山羊は蔣か張かであったが、後者がお辞儀をして去ったのである。彼は「諸事情を研究するために」一年間ヨーロッパに出かけたのである。（中略）

蔣介石が満洲を奪回しようと準備しており、無抵抗にこれ以上領土を譲らないと言明したときに、彼は明らかに蔣を信用したのであった。けれども一九三五年に日本の軍国主義者は攻撃をつづけた。冀東傀儡政権が樹立され察哈爾（チャハル）の一部は併合され、華北の華南からの分離が要求され、これに対し南京は一部分を黙諾したのであった。不吉な不満が張学良の将兵の間にみなぎった。彼らの不満は、張の軍隊が日本に対して一発の弾丸も発射しないのに、赤軍に対して不人気な内戦を敢行するために西北移動を命ぜられるに及んで、けんけんごうごうたるものとなった。

南方で赤軍と数か月闘ったのちに、青年元帥と彼の将校のある者は、次の重要な事実を知るようになった。すなわち彼らと闘っていた「匪賊」は、実際に有能な愛国的抗日将領によって指揮され

ているらしいこと、この「勦匪」の過程はさらに多年続けられるらしいこと、勦共戦が続けられるかぎり抗日は不可能であること、その間に東北軍は急速にプロレタリア化して自己にとっては無意味な戦闘で次第に減少し解体されてゆくこと、これである。それでも張がその司令部を西北に移したとき、彼は赤軍に対して精力的な作戦をはじめた。しばらくのあいだ彼はいくらか成功を得た。けれども一九三五年十月、十一月に東北軍は惨敗を喫し、完全に二個師（第百一師と百九師）と百十師の一部とを失った。数千の東北軍兵士が赤軍に転向した。多くの将校も俘虜になり、「抗日監視」の期間抑留された。

これらの将校が釈放されて西安に帰ると、彼らはソビエト区の士気と組織を説明し、特に赤軍との内戦を停止し、中国を平和な民主的方法で統一し、日本帝国主義に反抗するために連合しようとする誠意のあることなど、烈々たる報告を青年元帥に持ち帰った。張は感銘を受けた。「中国人は中国人と戦うべからず」と「われらと連合して満洲へ帰ろう」という赤軍のスローガンは全東北軍の一兵卒にも浸みこみ、全軍の感情は赤軍作戦に反対しつつあるという麾下各師からの報告に張はますます感動を受けた。

そうこうするうちに、張自身左翼の影響を大いに受けた。彼の東北大学の多くの学生が、西安にやって来て彼と一緒に働いていたが、彼らの間に共産党員がいた。一九三五年十二月の北京における日本の要求ののちに、彼は華北にたいし全抗日学生はその政治的信念のいかんにかかわらず、西安府で避難所を得られると呼びかけた。全中国の抗日煽動家が南京政府に逮捕されていたのに、陝

西では彼らは激励され保護されていた。張の青年将校のある者も学生から非常に影響を受け、捕虜となった将校が赤区から帰って同地区では公然たる抗日大衆組織が活動していると報告し、人民の間での赤軍の愛国的宣伝を語るのを聞いて、張はますます赤軍は敵というよりは当然の盟友だと考えるようになった。

王牧師が私に語ったところでは、彼がある日張学良を訪れ、

「私は赤区に行くためにあなたの飛行機を借りに来たのですよ」

といって会見の口火を切ったのは、ちょうどこのころで、一九三六年のはじめのことであった。張は飛び上がって、驚いて睨みつけた。

「何だって、よくもここへ来てそんな要求ができたもんだ。それがだれでも銃殺されるということを知らないのかね」

牧師は詳細に述べた。彼は共産党員と接触があり、張が知らねばならないことを知っていると説明した。彼は共産党の政策の変化していること、抗日のためには中国統一が必要なこと、赤軍は単独では実現し得ない抗日政策へ南京を動かすための大譲歩の用意があること、などについて長いあいだ語った。彼は張とある赤軍の領袖とのあいだで、これらの点をさらに討議するのを斡旋しようと申しでた。張は最初は驚いたものの、すべてこれにたいして熱心に耳を傾けた。彼はしばらく前から赤軍を利用できると考えていたし、赤軍もまた明らかに彼を利用できると信じていた。（中略）

結局牧師は青年元帥の私用飛行機で、陝北の延安に飛んだ。彼はソビエト中国に入り交渉の方式

を持ち帰った。そしてそのすぐあとで張学良自身延安に飛行し、赤軍司令周恩来（この人についてはさらにあとでふれる）と会見し、彼と長いあいだ詳細に討議したあとで、赤軍の誠意と統一戦線に対する赤軍の提案が健全で、しかも実際的なことを確信するようになった。

東北軍と共産党の協定の履行の第一歩は、陝西における敵対行動の中止で、いずれの側も他方に通知せずには移動しないこととなった。赤軍は若干の代表を西安府に送り、彼らは東北軍の制服を着用し、張学良の幹部に加わり、彼の軍隊の政治訓練方法を改組するのに助力した。新しい学校が王柱村に開かれ、ここで張の下級将校は政治・経済・社会科学・日本の満洲征服方法とこれによる中国の損失状況の詳細な統計的研究など充実した講義を受けた。数百の急進的な学生が西安に集まり、他の抗日政治訓練学校に入学したが、ここでは青年元帥もしばしば講義を行なった。ソビエト・ロシアと中国赤軍が使用している政治委員制度のようなものが、東北軍で採用された。満洲時代からの一群の旧式な封建的高級将校は淘汰され、彼らの補充に張学良はもっと急進的な青年将校を昇進させ、彼は彼らを新しい軍隊の編成における主要な支柱とみなしたのである。張の「遊蕩児」時代に彼を取りまいていた腐敗した阿諛（あゆ）者の多くは追い払われ、そのかわりに熱心な真面目な東北大学生が採用された。

けれども以上の変化の過半は、極秘のうちに進展した。東北軍はもはや赤軍と闘わなかったけれども山西と陝西の境界に沿って、また甘粛と寧夏には南京の軍隊があり、以上の地方では猛烈な戦闘が継続していた。張と共産党との本当の関係については新聞には一言も掲載されなかった。そし

て蔣介石の西安にいた密偵は、何かが醗酵しつつあると感づいてはいたが、その本当の性質の詳細はほとんど摑めなかった。ときどき赤軍の乗客を乗せてトラックが西安に着いた。だが彼らはすべて東北軍の制服を着ていたので、何とも思われなかった。そして他のトラックが西安から赤区へときどき出発しても、なんの嫌疑も受けなかった。というのはそれは前線に向かう他の東北軍トラックと似ていたからである。

〔44頁〕 周恩来――赤軍東部前線司令

司令部は多くの防空舎のうちの一つにあり、そのまん中に赤軍の東部前線司令がいた。（中略）蔣介石が八万元を首に懸けた周恩来の司令部の前には、たった一人の哨兵が立っていただけだった。

室内を私が見たところ、部屋は清潔であったが、家具装飾はきわめて貧弱だった。粘土の坑（おんどるのこと）の上に懸けられた蚊帳が唯一の「贅沢品」であった。二個の鉄の文書函がその下におかれ、小さな木の食卓が机のかわりをしていた。哨兵が私の来たことを知らせたときに、周はその上に前かがみになって無線電報を読んでいた。

「私は貴方が中国民衆に友情のある信頼できるジャーナリストで、本当のことをいってもよい、間違いのない方だという報告を受けとりました」

と周は言った。（中略）

明らかに私に関するその「報告」は西安の共産党の秘密本部から来たのである。共産堂は上海、漢口、南京、天津をふくむ中国のすべての重要な都市と無線連絡を持っている。白区の都市で共産

党側の無線設備をしばしば押収したにもかかわらず、国民党は赤区との連絡を長期にわたって断絶するのに成功しなかった。周の言うところによれば、赤軍が白軍からぶん取った装置で無線部をはじめて設けた時以来、国民党は赤軍の暗号を解くことができなかった。

周の無線所は彼の司令部から少し離れた所に設けられていた。これを通して彼はソビエト地区のあらゆる重要地点とあらゆる前線とに連絡をたもっていた。当時朱徳の主力は西南方数百里の四川・西蔵の国境に駐屯していた。西北の臨時ソビエト首府たる保安には赤軍の無線学校があって、そこでは約九十人の生徒が無線の専門技術者として訓練されていた。かれらは南京、上海、東京の毎日の放送を捉えて、ソビエト中国の新聞にニュースを供給していた。

周は小さな机の前にうずくまって、無線電報をそばにおいた。――その大部分は、赤軍の「東部前線」たる山西省側の黄河に沿ったあらゆる地点に駐屯する部隊からの報告であった。

〔304頁～310頁〕 西安事件前夜

西安は中国の大開港場においては外国人にとっても遠く離れた存在であり、新聞記者でもそこを訪れた者は少ないのであった。最近数か月のうちに西安に行った外国の通信員はなく、そこで行なわれる事件について信頼すべき根拠を握っている者もなかった――ただひとつの例外をのぞいて。その唯一の例外はアメリカの著作家ニム・ウェールス嬢であったが、彼女は十月に西安に行って、青年元帥と会見した。ウェールス嬢は西北で高鳴っている脈膊を、正確に報道してつぎのように述べている。

「中国の『西の都』西安府では、勦共のために当地に駐屯している青年元帥張学良部下の、極端的に反日的な東北軍の内部で重大な事態が発展しつつある。一九三一年の二十五万人から現在の十三万人に淘汰されたこの軍隊は、すべて『故郷を失ったひとびと』で、帰郷の念強く、内戦に飽き、日本に対する南京政府の無抵抗政策の継続に痛憤している。下級兵士の態度は叛乱といえるほどであるが、この感情は高級将校のあいだにすら滲透している。このような情勢から、以前は良好であった張学良の蔣介石との私的関係すら緊張するに至っているとか、彼が赤軍と連合してひとつの国防政府の指導下に抗日連合戦線を計画しているとか、そういう流言すら現われるようになった」

「中国における重大な抗日運動は、北から南におよぶ各種の『事件』においてではなく、――当然論理的に期待されるように――西安において、満洲から追われた東北流民のあいだにおいて形成されつつある。この運動は中国内の他の地方では禁止されているが、西安では青年元帥張学良の公然たる熱烈な指導をうけ――その軍隊によって強制されるわけではないとしても、その軍隊によって熱心に援助されているからである」(注)

注　ニューヨーク・サン、一九三六年十月二十五日号。

張学良との会見の重要な意義を思いかえしながら、ウェールス嬢はつぎのように書いている。

「実際上、またこの談話の背景を考え合わせると、この会見は、蔣介石にたいする積極的な反日抵抗を指導するように、との勧告と看做すことができる。……同時にまたそれは、一種の威嚇をふくんでおり(彼のことばを使えば)、『外国の侵略に抵抗することによってのみ(すなわち、内戦によって

ではなしに)中国の真の統一ははじめて出現する』のであり、『もし政府が民衆の意志に従わないならば、政府は存立し得ない』と述べた。この副司令(その地位は蔣介石に次ぐものである)が、『もし共産党が誠意をもって合作して共同の外来侵略者にあたるならば、おそらくこの問題は平和的に解決し得るだろう』と語ったことはとくに重要である……」

正しくそれは叛逆的な談話である！　しかし、蔣介石はあきらかにこの警告の重大性を過小評価した。十月に彼は甘粛の赤軍を攻撃するためにその先鋒として、彼の一番精鋭な第一軍をさし向けた。彼も西安に到着したが、その目的は赤軍にたいする第六次討伐の総攻撃の計画をまず完成するためであった。西安と蘭州においては、百機以上の爆撃編隊を備える準備が行なわれた。多数の爆雷が到着した。毒ガスも使う準備ができたと報ぜられた。これだけが「二、三週間永くとも一か月のうちに赤匪の残党を殲滅する」(注)という蔣の御自慢の解釈であるように見える。

注　蔣の日記(「西安半月記」をさす)を参照。

十月の西安訪問ののち、蔣はひとつの事を理解しなければならなかった。それはすなわち勦共戦にたいして東北軍はもう無用になりつつあったということである。東北軍の領袖と会談しているうちに、蔣主席は新しい攻撃についての関心がまったく欠けていることを認めることができた。張学良の参謀のひとりはのちになってから、当時その青年元帥(張学良)が蔣主席にたいして、民族戦線、内戦の停止、連露抗日の意見書を正式に提出したことを私に語った。それにたいする蔣介石の回答は次のごとくであった。

「赤軍の兵隊を中国からひとり残らず消滅させ、共産党員をひとり残らず牢獄に入れるまでは、この問題について語りたいとは思わない。その時になって初めてロシアと合作することができるだろう」

蔣主席は洛陽の行営に帰って、新しい戦闘の準備を検閲した。もし必要なら二十個師の軍隊を西北に移す準備ができていた。十一月の終わりには、すでに戦闘準備のできた十個師以上の軍隊が陝西への門戸として歴史的に有名な潼関（葛西注＝隴海線の河南省境寄り。西安へ約百四十キロ）に集中していた。汽車に満載した砲弾と軍需品が西安に運ばれた。戦車、装甲車、貨物自動車などもそれにつづいて輸送する手筈が備わっていた。（中略）

このような事件のまっただなかに、蔣介石は一九三六年十二月七日、かれの大型飛行機から西安の飛行場へ下り立ったのである。

同時に、同じ舞台の左右ではいずれも重大な事件が発生していた。東北軍の将領のあいだでは、内戦を停止して日本に抵抗するという一致した要求の提出が協議されていた。協商へはまた陝西綏靖主任楊虎城将軍の部下の将校も参加した。楊将軍については先に述べたとおりである。約四万からなる楊将軍の軍隊もまた、東北軍以上に赤軍との戦争の継続に興味を感じていなかった。彼らにとっては、勦共は南京の戦争にほかならず、自分を犠牲にして勦共を行なう理由はひとつもなかった——赤軍の多くは彼らと同様に陝西の民衆であった。しかも日本軍がまさにその隣接省たる綏遠へ侵入しつつある時でもあり、彼らにとってそれは一種の恥ずべき戦争であった。通常西北軍という名で知られている楊将軍の軍隊は、それに先だつ数か月前に東北軍と緊密に連合し、ひそかに赤軍と休戦状態に入っていた。

これらすべてのことはすでに軍事委員長兼行政院長たる蔣の耳へも入っていた。彼は過去において西安に軍隊を常駐させてはいなかったが、数か月前約千五百人からなる有名な第三憲兵団、すなわち藍衣社のいわゆる「特務団」が同市に到着して陝西省全体の間諜機関を設立し、「共産分子」と目される学生や政治工作者や兵士の逮捕と監禁を開始した。同団の指揮をしたのは、蔣の甥の蔣孝先であるが、彼は前から数百人の急進分子を逮捕、監禁、殺害する任務を与えられていた。南京の任命した陝西省政府主席邵力子は省城の警察力を完全におさえていた。そのため、張学良も楊虎城も城内では衛兵以外の部隊を有せず、蔣委員長がそこのいっさいの実権を握っていたのである。

このような形勢はさらにひとつの意想外な事件をひき起こすことになった。蔣が到着してから二日たった九日に、数千人の学生が反日示威運動を挙行し、臨潼へ向かって行進し、委員長に嘆願書を提出しようとした。蔣主席はその解散を命じた。警官に蔣介石の憲兵の一部が加担して学生を手荒にあつかい、ある個所では学生に向かって発砲した。ふたりの学生が負傷したが、たまたまふたりとも東北軍将校の息子であったので、この発砲はとくに憤激を買った。張学良はそれに干渉し、対戦を停止させ、学生に省城に帰るよう勧告し、彼らの請願書を委員長の手もとにとどけることを約した。蔣介石はこの事件を怒り、張学良を罵って「両方面を代表」しようとする「不忠」を責めた。蔣介石はみずから、彼らのあいだに発生したこの事件こそ叛乱の直接の原因であると認めてい

る。

委員長の参謀部全員が彼の警備兵とともにみんな西安に来ていた。蔣は東北軍と西北軍の将領と、彼らの希望通り一緒に会見することを拒絶し別々に彼らと語って、各種の手段を用い両者の連合を破壊しようとした。この種の努力も失敗に帰した。すべての者が彼の最高統帥を承認したが、誰でも新たな総攻への参加を好まぬことを表明し、すべて綏遠の抗日戦線に送られることを要求した。彼らすべてにたいして蔣はただひとつの命令「赤匪を殲滅せよ」を与えた。蔣は自分の日記へつぎのように記している。

「剿匪はこれまでに実行された以上、最後の五分間で最後の勝利が得られるだろう、と彼らに語った」

かくしていっさいの反対や警告にもかかわらず委員長は十日に参謀部会議を召集し、この際第六次総攻撃を実施する最終計画が正式に決定した。西北軍、甘粛・陝西にある中央軍、および潼関に待機している中央軍にたいして動員令を下す準備が行なわれた。動員令は十二日に下されると宣言された。もしも張学良がこの命令を拒絶するならば、彼の軍隊は中央軍によって武装を解除され、彼自身指揮権を剝奪されると、公式に声明された。すでに張学良にかわって、蔣鼎文将軍が勦匪行営主任に任命された。同時に張と楊の耳へ、藍衣社と警察が彼らの軍隊内の共産党同情者のブラック・リストを準備しており、動員下令後ただちにそれらの者を逮捕する予定であるとの報が入った。

十二月十一日の夜十時、張学良が東北軍と西北軍の将領の連席会議を召集した時に、一連のこの

複雑な歴史的事件はその頂点に達した。その前日、東北軍の一個師と楊虎城軍の一団（葛西注＝一個連隊）にたいして、西安府の郊外に移動せよとの秘密命令が発せられた。この決定は、いまや両部隊による委員長およびその参謀部の「逮捕」の目的に利用された。十七万の軍隊（葛西注＝東北軍十三万、西北軍四万）の叛乱が、ついに事実となるにいたった。

〔311頁〜313頁〕西安事件

十二月十二日の朝六時に全事件は完了した。東北軍と西北軍が西安を占領した。眠りをさまされ藍衣社の連中は武装を解除されて逮捕された。実際に参謀部の全員が西安招待所の宿舎で包囲を受け監禁されてしまった。邵力子主席と省公安局長もとらわれた。西安の警察は叛軍に投降し、五十機の中央軍爆撃機とその搭乗員も、飛行場で捕獲された。

ただ委員長の逮捕には流血がともなった。蔣介石は西安かろ十マイルの有名な温泉地臨潼に、いっさいの遊客をしめ出して逗留していた。深夜おそく、張学良の衛兵長で二十六歳になる営長（葛西注＝大隊長）の孫銘九が臨潼におもむいた。彼はその途中で二百名の東北軍を選抜し、午前三時に臨潼の郊外に到着した。そこで五時まで待ち、五時に十五人ばかりをのせた第一の車が行営の門前に乗りつけ、歩哨と衝突して砲火をまじえた。

まもなく東北軍の先鋒隊から援軍が到着し、孫営長の指揮で委員長の宿所に進入した。衛兵はびっくり仰天して短時間抵抗した――しかし、それでも驚いた委員長を逃がすには十分の時間があった。孫営長が寝室に入ってみると、彼の姿はもう見えなかった。孫は温泉地の背後にある雪の積も

った石だらけの丘に一団の捜索隊を出してさがした。たちまち彼は委員長の家僕を見つけ出し、まもなく本人をさがし出した。彼は寝衣の上に大きな袍衣をつけただけで、裸の手足は山上にあわてて逃げるさいの掻傷をうけており、厳しい寒さの中でふるえ、入れ歯を失くして（葛西注＝この点には明らかに作為が感じられる。事件当日、蔣の正確な年齢は満四十九歳一か月十二日であり、仮りに義歯を使用していてもそんなに安っぽいものとは到底考えられないからである）、大きな竹の蔭の洞窟に身をひそめていたのである。

「孫銘九は彼に敬礼した。委員長の最初の言葉は、『君がもし私の同志なら、どうか私を射殺してほしい』というのであった。これにたいして孫はつぎのように答えた。『私たちは貴下を射つことはしません。ただ私たちの抗日を指導していただきたいのです』

蔣は石の上に腰をかけたままであった。そしてようやく口を開いた。『張副司令を呼んでくれたまえ、そうしたら山をおりよう』

『張副司令はここにいません。軍隊が城内で蜂起したので、貴下を保護しにきたのです』

この言葉をきいて委員長はすっかり安心したらしく、山をおりるから馬を連れて来るようにと言った。『ここには馬はありません』と孫は言った。『私がおぶって山を降りましょう』そう言って彼は蔣の足下に身をかがめた。少しためらったあげく、蔣は諒承して、痛々しそうにこの青年将校の幅広い背中に乗った。こうして両人は静かに坂を下り、軍隊が護衛した。ひとりの下僕が蔣の靴を持って来た。丘の麓で彼らは自動車に乗り、西安にむけて出発した。

『すぎ去ったことはもう仕方ありません』と孫は話しかけた。『今から中国は新しい政策をとらなければなりません。あなたはどうしようとお考えですか。……中国にとって目前の急務は日本と闘うことです。これこそ東北の人々が要望していることです。あなたはどうして日本と闘わないで、赤軍と闘う命令を下すのですか』

『私は中国民衆の指導者だ』と蔣は叫んだ。『私は国家を代表している。私は自分の政策が正しいものと思っているのだ』（注）

注　これはジェームス・バートラムの孫銘九との会見記の一部である。バートラムは「デイリー・ヘラルド」紙のために西安に駐在する私の通信員である。

こうして少しばかり血を流しただけで、屈服せずに委員長は省城に到着した。省城で彼は不本意ながら楊虎城および張学良将軍の客人となった。

この政変のあった日に、東北軍と西北軍の各師長は、中央政府と各省の領袖および全国の人民にあてて署名入りの通電を発した。この短い通電には、次のことが書かれてあった。委員長は、「彼の覚悟をうながすために」「しばらく西安府にとどまるよう要請」された。一方、彼の個人的安全は保証されている。委員長に呈請された「救国」の主張は全国に放送された――しかし、その発表はいたる所で禁止された。その有名な八項目の主張はつぎのとおりである。

一、南京政府を改組し、救国にたいして各党各派全部が共同責任をとること。

二、いっさいの内戦をただちに停止し、武装抗日政策を採用すること。

三、上海で逮捕された（七人の）愛国運動の領袖を釈放すること。
四、いっさいの政治犯を釈放すること。
五、人民の集会、結社の自由を保障すること。
六、人民の愛国組織と政治的自由の権利を保障すること。
七、孫逸仙総理の遺志を実行すること。
八、ただちに救国会議を召集すること。

右の綱領にたいして、中国赤軍、中国ソビエト政府および中国共産党は即刻支持を与えた。数日後、張学良は自家用飛行機で保安にとび、三人の共産党代表を連れてもどった。それは軍事委員会副主席の周恩来、東部赤軍参謀長の葉剣英、西北ソビエト区政府主席の博古の三人であった。東北軍と西北軍と赤軍のあいだで連席会議が開催され、三つのグループは、公式の連盟をつくった。

〔320頁〕 周恩来の大活躍

共産党の首席代表周恩来は西安に来ると、すぐ蔣介石を訪問した(注)。この会見が委員長にどんな効果を与えたかは、何人も容易に想像されるであろう。周恩来――蔣の昔の部下で、その首にはかつて蔣から八万元の賞金をかけられたことがある――が室に入って来て友好的な挨拶をした時には、もともと体が虚弱で心理的にもこの経験で深い打撃をうけていた蔣は、恐れて顔色を蒼白にしたということである。彼はただちに赤軍が西安に進入したものと断定し、自分は捕虜として赤軍に引き渡されるものと判断したにちがいない。（中略）

しかし、委員長はすぐに周恩来と張学良の両者にたいする恐怖から救われた。ふたりとも彼を統帥として待遇し、席に坐って、国難にたいする共産党の態度を説明しはじめたからである。はじめは冷酷に沈黙を守っていたが、そのうち徐々に蔣は共産党の意見に耳をかたむけてうちとけてきた。こんなことは十年来の反共戦中はじめてのことであった。十二月十七日から二十五日までのあいだに、蔣介石、張学良、楊虎城および共産党代表はしばしば会議を重ねた。

中共中央委員会が国民党五期三中全会に宛てた電報

『中国共産党中央給中国国民党三中全会電』を全訳

一九三七年二月十日　発信

中国国民党三中全会の各先生方

西安事件の平和解決は挙国慶賀するところで、これで平和統一・団結防侮の方針が実現し得ることは実に国家民族の至福である。日本侵略者が暴虐のかぎりをつくし、中華民族の存亡危機一髪の時にあたり、わが党は、貴党三中全会がこの方針にもとづき、下記の各項目を国策として決定されんことを切望するものです。

(一)すべての内戦を停止し、国力集中、一致外敵にあたる。

(二)言論・集会・結社の自由、すべての政治犯釈放。

㈢各党・各派・各界・各軍の代表会議を召集し、全国の人材を集め、共同して救国にあたる。
㈣抗日戦争のすべての準備工作を迅速に完成する。
㈤人民生活の改善。

もし貴党三中全会が決然としてこの国策を確定されるならば、わが党は団結防侮の誠意を示すため、貴党三中全会に下記の保証を致します。

㈠国民政府打倒の武装暴動（葛西注＝革命のこと）方針を全国的に停止する。
㈡ソビエト政府を中華民国特区政府に、紅軍を国民革命軍に改称し、南京中央政府と軍事委員会の直接指導をうける。
㈢特区政府の区域内では普通選挙による徹底的な民主制度を実施する。
㈣地主の土地を没収する政策を停止し、抗日民族統一戦線の綱領を断固実行する。

国難は日増しに深まり、一刻も猶予できず。わが党の国家に対する忠誠は、天地神明に誓うものです。各先生方の国を思う気持ちは、必ずやわが党の要求を容れてくれることでしょう。全民族が外侮を防ぎ、国家民族の滅亡を救うための統一戦線はそうすることにより間違いなく実現します。私たちは同じ黄帝（葛西注＝中国上古の天子軒轅氏）の子孫で、同じ中華民族の子です。国難を目前にしては、一切の偏見をすてて緊密に合作し共同して中華民族徹底解放のための偉大な方向を目ざすほかありません。ここに謹んで電報をもってわが方の意向を伝え、高邁なるご指導をお待ちするとともに、民族革命の敬礼を送ります。

中国共産党中央委員会

二月十日

〔葛西注〕

蘆溝橋事件の約五か月前に打たれたこの電報には「内戦停止、一致抗日」のほか、公然と「革命放棄、紅軍を国軍にくれてやる」から国共合作しようと矢の催促。土下座哀願の度がすぎて、こともあろうに「国民党と共産党は同じ黄帝の子孫だ」と歴史にのこる屈辱的発言もあえてしたのだが、事実中共は国民党蔣介石に第六次勦共戦で全滅させられる危険はまだまだ残っており、なりふりを気にする余裕はなかったのである。それ以上に、日中戦争を誘致する必要に迫られていたのは極めて明瞭であった。なぜなら、日中戦争の勃発のみが『第六次勦共戦』を完全に中止させる唯一無二の保証であったからだ。中共にとって『国共合戦』は次要のもので『日中戦争』の勃発こそ主要な狙いであった。また日中戦争が勃発しなければ『一致抗日』のスローガンは当然色あせてしまい、したがって『内戦停止』のお題目も用をなさなくなり、『国共合作』どころか『第六次勦共戦』が発動されると中共が滅亡することは自明の理となっていた。なお、この電報に対する中国国民党の回答は本書二一一頁『赤禍根絶決議』を参照されたい。

中共中央委員会が日本軍の蘆溝橋進攻に際しての通電

『中国共産党為日軍進攻蘆溝橋通電』を全訳

一九三七年七月八日　発信

全国の各新聞社・各団体・各軍隊・中国国民党・国民政府・軍事委員会および全国の同胞諸君へ

七月七日夜一〇時、日本は蘆溝橋において中国の駐屯軍馮治安部隊に対し攻撃を開始し、馮部隊に長辛店（葛西注＝永定河の蘆溝橋対岸寄り）への撤退を要求した。馮部隊では衝突の発生を許さなかったため、目下双方はまだにらみあいをつづけている。蘆溝橋における日本侵略者のこの挑戦的行為の結果、ただちに大規模な侵略戦争にまで拡大されるか、あるいは外交的圧迫という状況をつくりあげ、それによって将来における侵略戦争への導入とするかのいずれをとわず、北平・天津と華北に対する日本侵略者の武力侵略の危険性はきわめて重大なものとなった。この危険な情勢はわれわれに、これまでの日本帝国による対華新認識・新政策といった空論が、中国に対する新しい攻撃の準備を隠す煙幕にすぎなかったことを教えている。中国共産党はすでに早くから全国の同胞にこの点をはっきりと指摘してきたが、今やこの煙幕は取り除かれた。日本帝国主義の北平・天津と華北に対する武力による占領の危険は、すでに一人一人の中国人の目前に迫っている。

全国の同胞諸君！　北平・天津危し、華北危し、中華民族危し。全国民族が抗戦を実行してのみ、われらの活路あり！　われらは進攻する日本軍に対し、ただちに断固反撃を加えるとともに新たな大事変に即応する準備を急ぐように要求する。全国の人びとは上下をとわず、日本侵略者に一時的な平和や安堵を求めようとするいかなる希望や思惑も、ただちに捨てなければならない。

全国の同胞諸君！　われらは馮治安部隊の英雄的抗戦を称賛、支持しなければならず、国土と存亡をともにするという華北当局の宣言を称賛、支持しなければならない。われらは宋哲元将軍がただちに二十九軍全軍を動員して前線に赴き、応戦することを要求する。われらは南京中央政府がただちに二十九軍に適切な援助を与えるとともに、全国民衆の愛国運動を開放し民衆の抗戦士気を発揚させるよう、またただちに全国の陸海空軍を動員して抗戦の準備をととのえ、中国領内に潜伏している漢奸・売国奴らと日本侵略者のすべてのスパイをすぐに一掃し、後方を強固にするよう要求する。われらは全国人民が全力をあげて神聖な抗日自衛戦争を支援するよう要求する。

われらのスローガンは――

武装して北平・天津、華北を防衛しよう！

寸土たりとも日本帝国主義の中国占領を許さない！

国土防衛のため最後の血の一滴を捧げよう！

全国の同胞・政府・軍隊は団結して民族統一戦線の堅固な長城を築き、日本侵略者の侵略に抵抗しよう！

国共両党は親密に合作し、日本侵略者の新たな進攻に抵抗し、中国から追い返そう！

中国共産党中央委員会

一九三七年七月八日

〔葛西注〕

電文は七月七日夜一〇時、といわゆる日本軍の先制攻撃時刻を明示しているが、事実は八日午前五時半の応戦であり、従ってこの「夜一〇時」は劉少奇ら中共中央北方局の地下工作員が、日支両軍に向けて銃声（爆竹のような）を同時に浴びせかけ〝点火〟に成功したという無電報告によるものと思われる。

日中戦争によるしか党を滅亡の瀬戸際から救う手段はないとする中国共産党は、ここでも、「日本侵略者に一時的な平和の幻想を抱くな」と声高く叫んでいる。これでは現地の冀察当局と二十九軍が日本側駐屯軍と何ほど不拡大への努力を重ねても、抗日怪事件が次々と続発したはずである。火をつけた者が「火よ、どんどん燃えろ」と必死で祈り、「火は消えないぞ」と声高く叫び、消えそうになれば又点火するのでは何をか言わんやである。

電文末尾の「国共両党親密合作……」は中国共産党の手のうちを公然と吐露したもので、これによってまずは国民党蔣介石から全滅させられる危機を完全に脱し、逆に蔣を日本に叩かせる一石三鳥の大作戦は初歩的成功を収めたのである。

日本侵略者の華北進攻に際して紅軍将領が宋哲元らに宛てた電報

『紅軍将領為日寇進攻華北致宋哲元等電』を全訳

一九三七年七月八日　発信

北平宋明軒（哲元）先生、天津張自忠先生、張家口劉汝明先生、保定馮治安先生ご高覧

日本侵略者の進攻は全国民を激怒させ、蘆溝橋の戦役における二十九軍の勇敢なる抗戦の模様を聞き、全国民はその後ろ楯となることを願っている。諸先生が全軍を激励して北平・天津防衛のために戦い、祖国の寸土たりとも日本侵略者の占拠にゆだねることなく、国土防衛のため血を最後の

一滴まで流されんことを敢えて願い、紅軍将兵は満腔の義憤を抱きいつでも出動できる準備をなし、貴軍に従って日本侵略者と決戦を交えんとしている。委員長および全国の友軍が勇敢に敵を倒すよう打電するとともに、右のとおり伝達申し上げご指教を仰ぐ次第です。

毛沢東　朱徳　彭徳懐　賀竜　林彪　徐向前　劉伯承

七月八日　頓首

〔葛西注〕

発信人氏名から軍委会副主席周恩来の名が脱落している。これは華北が周を嫌っていたせいか。

なお、『頓首』とは頭で地を叩いて敬意をあらわす中国の礼式。

日本侵略者の華北進攻に際して紅軍将領が蔣介石委員長に宛てた電報

『紅軍将領為日寇進攻華北致蔣委員長電』を全訳

一九三七年七月八日　発信

廬山にある蔣委員長ご高覧

日本侵略者は蘆溝橋に進攻し、武力による華北奪取という既定の段取りを実行に移した。このニュースを聞き、われらはただ驚きのあまり茫然としている。北平・天津は華北の要衝であり、これ

以上の喪失は断じて許せない。よって願わくば二十九軍に対し、勇奮抵抗するよう厳命されると同時に、滅亡を防ぐため抗戦するといった（国民党）三中全会の主旨にもとづき、全国総動員を実行して北平・天津を防衛し、華北を防衛し、失地を回復されんことを。全紅軍将兵は委員長（蔣介石）指導のもと、国家に生命を捧げ、敵に対抗して国土と国家を防衛する目的を達成せんことを希望している。以上、事態急迫せるまま燕辞をつらね甚だ恐縮にたえず、ただ命を待つのみです。

毛沢東　朱徳　周恩来　彭徳懐　賀竜　林彪　劉伯承　徐向前　葉剣英

七月八日　頓首

〔葛西注〕

中国共産党は自分で放火しておきながら「火事だ！　火事だ！　華北丸焼けだ！　蔣委員長閣下、早く大命降下を……」と叫び、「一族郎党（紅軍）みなもの蔣委員長閣下の指揮下に入れ、義勇奉公と参ります」と、トラの子である紅軍まで捨て子する高等戦術に出た。母体（中共党）が助かる為にはガキ（紅軍）を敵（蔣介石）に売り渡すしかなかったのである。この捨て子戦術は見事に成功し、この日から四十五日後の八月二十二日、紅軍は晴れて国軍＝中華民国国民革命軍陸軍第八路軍に正式に編入された。従って、抗日戦争を八年間戦いぬいたのは『中華民国軍』ということになり、いわゆる共産軍、共産八路軍等の軍隊は、実在しなかったわけである。この事実により、中国共産党の『抗日戦争史』は相当部分書きかえられなければならない。

この電文末尾にも『頓首』が登場したのは、中共の苦しまぎれの様相を如実に物語るものといえよう。

中国人民抗日紅軍が華北当局及び二十九軍将兵に宛てた特急電報

『中国人民抗日紅軍致電華北当局暨二十九軍将士快郵代電万万火急』を全訳

一九三七年七月九日　発信

北平の宋（哲元）委員長、保定の馮（治安）主席、北平の秦（徳純）市長、天津の張（自忠）市長、万全の劉（汝明）主席、ならびに二十九軍全将兵に移牒して御高覧を仰ぐ

七日夜の事実は世を挙げて震憾驚倒せしめるもので、日本侵略者の残虐性と中国を滅亡させようとする野心は残らず暴露された。貴軍は国防の最前線にあって凶暴を恐れず、奮起して抵抗された。その忠義、壮烈なること軍人の模範たるに恥じず。抗日救国の旗印をかかげるわが軍は矛を枕に出動をまつこと既に一日ならず、誓って貴軍の後ろ盾となるものなり。（われらは）既に国民政府およびソビエト政府（中華）に打電上申し、国民政府が大軍を派遣して貴軍を増援するよう懇願、且つただちにわが軍を国民革命軍と改称し抗日に生命を捧げるべく命令するよう請願した。ここに貴軍に対し熱烈なる慰労の意を表するとともに、貴軍が必ずや忠義をまっとうされ、奮起して国土防衛の光栄ある任務を最後まで持久されんことを確信するものなり。

彭徳懐　賀竜　劉伯承　林彪　徐向前　葉剣英　左権　肖克　徐海東　ならびに人民抗

日紅軍指揮員戦闘員全体　　一同頓首　九日

〔葛西注〕

前日（八日）の通電（全文本書別掲）に続いて、今日は特急電報をもって二十九軍をけしかけている。見事、点火に成功した蘆溝橋の日中戦争の火が、二十九軍と日本側駐屯軍の話し合いで消されてしまっては大変困るのであった。『一同頓首』の四字はそれをよく表現している。

中国人民抗日紅軍が蘆溝橋事件に際して各方面に宛てた特急書簡

『中国人民抗日紅軍為蘆溝橋事件快郵代電万万火急』を全訳

一九三七年七月九日　発信

廬山の蔣（介石）委員長、ならびにこれを移牒される南京当局の諸公、西安行営の顧（祝同）主任および何（応欽）副主任、延安の毛（沢東）主席および朱（徳）総司令、雲陽の彭（徳懐）総指揮および任（弼時）政治委員、ならびに全国各軍師長のご披見を仰ぐ

暴虐なる日本の横行を伝える警報が頻々とくる。汕頭事件が未解決なままひき続いて蘆溝橋事件が発生した。ニュースを聞き、全軍憤激す。日本侵略者はわが国を滅ぼそうとし、寸を得て尺を進

む。度重なる事件にわが方はもはや容認の余地なく、犠牲は既に最後の瀬戸際にたち至った。国事をはかり成果をあげている諸公は、民意を体し、ただちに大軍を派遣することができる。華北の国防を増援し、華北を孤立無援の結果第二の東北と化し国権喪失、国土失陥の危険におちいらしめてはならない。人民抗日紅軍は救国救民を旗印とし、三中全会（国民党）への通電が発せられてより、共産党から国民党にいたるまですべて共通の信念にたっている。願わくば（抗日紅軍は）国民革命軍に改編され、全国の武装勢力と一体となり救国にあたらんことを期すると共に、ただちに華北に赴き日本侵略者と決戦を行ない、華北防衛、失地回復のため徹底的に奮戦することを希望する。とくに請願することは、人材の集中、言論・出版・結社の自由開放、全政治犯の釈放である。これは（国民党）三中全会が決定した政策であり、且つ蔣委員長が堅持してきた主張でもある。南京の諸公に懇請することは、この主旨にもとづいて全国人民がみなそれぞれの才能を十分に発揮でき、国家のために生命を捧げることができるような措置を速かに講ぜられることである。国難は一日ましに深まり、遅疑すれば国力を損ずるのみで、敵（日本）の喜ぶところである。華北危し。全軍将兵は出動準備を終わり、武器を手にして北上の命を待つのみである。終わりにのぞみ貴命を切に懇願する。

中国人民抗日紅軍第一軍団、第一五軍団、第一方面軍、第四方面軍、第四軍、第三一軍、第二七軍、第二八軍、第三〇軍、教導師、独立第一師、独立第二師、七四師の指揮員戦闘員全体　　一同頓首

七月九日

〔葛西注〕
華北の二十九軍に対しては「蘆溝橋の火を消すな」と打電（本書前掲）、同じ電鍵で南京に対し「国軍に改編、華北へ行き日本軍と決戦したし」と懇願しているが、本当に華北へ行けば日本軍に殲滅されることは百も承知の『中国人民抗日紅軍』であった。しかし、そう押してゆけば念願成就『国軍編入』だけは目の前であった。そうすれば蔣委員長から五十万の大軍を差し向けられて殲滅される危険は、ぐんぐん遠のき一安心となるのだった。まさに『一同頓首』がピッタリである。

中共中央委員会が国共合作を公布するについての宣言

『中国共産党為公布国共合作宣言』を全訳
一九三七年七月四日　発信

親愛なる同胞各位！　中国共産党中央委員会は、わが全国の父兄姉妹のみなさんに情熱をもって謹んで次のことを宣言する。――この民族存亡の瀬戸際に直面した重大難局にあたり、祖国の滅亡を救うため、平和・統一・団結防侮の基盤にたち、われらは既に中国国民党との了解をとりつけ、共に国難に赴く運びとなった。このことはわが偉大なる中華民族の将来にとって大変重大な意義を

もつであろう！　周知のとおり、民族の生命がこの上ない危機に直面している現在、わが民族内部の団結のみが日本帝国主義の侵略にうちかつ要素である。いまや民族団結の基礎は据えられ、わが民族の独立・自由・解放の前提も既にできあがった。中共中央はとくにわが民族の輝く前途のために祝福するものである。

しかしこの輝く民族の未来を現実に独立・自由・幸福の新中国とするには、やはり全中国の同胞、熱血溢るる黄帝の子孫一人一人のゆるぎなき努力と奮闘が必要なことをわれらは知っている。中国共産党はかかる時機にあたり、全国の同胞に対しわれらの全般的な奮闘目標をここに提示したい。

一、中華民族の独立・自由と解放をかちとること。それには先ず第一に、適切かつ迅速に民族革命の抗戦を準備し発動して、失地回復、領土主権の完全性を回復することである。

二、民権政治を実施し、国民大会を召集して憲法を制定し救国の方針を規定すること。

三、中国人民の幸福な楽しい生活を実現すること。それにはまず第一に適切なる災害救済、民生の安定、国防経済の発展、人民の苦痛を取り除き人民生活を改善すること。

これらの諸項目はいずれも中国が早急に解決を要するものであり、したがってこれらの奮闘目標をかかげれば、必ずや全国同胞の心からの賛助を得られるものとわれらは確信する。中共はこの全般的綱領を目標に、全国同胞と手を携え一丸となって努力することを願うものである。

この崇高な目標を実現してゆく前途には数多くの障碍や困難があり、先ず第一に日本帝国主義の防害と破壊を克服してゆかねばならないことを、中共はよく理解している。敵（日本）の陰謀に口

実を与えず、またあらゆる善意の懐疑論者の誤解を除去するために、中国共産党中央委員会は民族解放事業に対する自らの赤誠忠義の真心を披瀝すべきと考え、そのため中共中央は全国に向かって次のことをあらためて厳かに宣言する。

一、孫中山先生の三民主義は、今日の中国にとって欠くべからざるものであり、わが党はその徹底的実現のため奮闘する。

二、国民党政権を覆すためのすべての暴動政策及び赤化運動を中止し、暴力によって地主の土地を没収する政策を停止する。

三、現在のソビエト政府（中華）を取り消し、民権政治を実施して全国政権の統一を期す。

四、紅軍の呼称と番号を取消して国民革命軍に改編、国民政府（南京）軍事委員会（蔣介石）の統轄を受け、命令あり次第出動して抗日前線における職責を担うものとする。

親愛なる同胞諸君！　わが党のこうした公正無私、委曲を尽くして事を運ぶ態度は、全国同胞に対するその言行にはやくから明示され既に同胞諸君の支持を得ているところである。誠心誠意国民党との団結をかちとり、全国平和統一をうち固め、抗日の民族革命戦争を実行するために、われらは今、右の公約のなかで未だ形式上実施されていない部分、たとえばソビエト区域の取り消し、紅軍の改編等を直ちに実行するつもりであり、そうすることによって統一団結した全国力をもって外敵（日本）の侵略に抵抗せんとするものである。

侵略の魔手は深い！　その災禍は限りない！　決起せよ同胞たち。打って一丸となろう！　偉大で悠久な歴史をもつわが中華民族は、屈服することを知らない民族である。起ち上がり、民族の団結を固めるために奮闘しよう。日本帝国主義の抑圧をはねかえすために奮闘しよう。勝利は中華民族のものである。

抗日戦争の勝利万歳！

独立・自由・幸福の新中国万歳！

中国共産党中央委員会

〔葛西注〕

冒頭に「祖国の滅亡を救うため……」とあるが、『祖国』を『中国共産党』に読み替えたほうが迫真性がある。

この宣言は一名『国難突破、救国宣言』ともよばれ七月四日（蘆溝橋事件の三日前）に公布されたが、七月十五日に国民党に手交され九月二十二日に国営の中央社より全国放送された。

三民主義の実現、赤色革命の放棄、紅軍の捨て子等々ウソを沢山並べて国民党ににじり寄る姿は、いくら苦しまぎれとはいえ興味深い。

中共中央委員会が日本帝国主義の華北進攻に際しての第二次宣言

『中国共産党為日本帝国主義進攻華北第二次宣言』を全訳

一九三七年七月二十三日　発信

特急便！　全国の各新聞社・各団体・各武装部隊・中国国民党・国民政府・軍事委員会ならびに全国同胞諸君！

各方面の消息によれば、冀察当局宋哲元はすでに日本側提起の下記三条件を受け入れたことが明白である。

つまり㈠冀察当局が日本側に謝罪すること。㈡二十九軍は北平・天津・蘆溝橋・永定河以東から撤退すること。㈢民衆の抗日救亡運動を弾圧し中日共同防共を実行することである。これらの条件はすでに実行されはじめているが、このほかに秘密協定の有無についてはまだわかっていない。

全国の同胞諸君！　国権喪失、国辱的なこれらの条件は、全中国人民と中国共産党が要求するところの北平・天津の防衛、華北の防衛、日本帝国主義に中国領土の寸土たりとも占領させないということと全く正反対のものである。また蔣介石先生が七月十七日に表明された蘆溝橋事件についての最低限度の四つの立場㈠どんな解決策でも中国の主権と領土の完璧性を侵害するものであってはならない。㈡冀察行政組織に対するいかなる不法な変更も許さない。㈢中央政府の派遣した地方官吏、たとえば冀察政務委員会委員長宋哲元などの更迭を何人も要求することはできない。㈣二十九軍の現駐留地区についてはいかなる拘束も受けない）とも全く相反するものである。われらの政府と人民は断じてこのような屈辱的な投降条件を呑んではならない！　われらは冀察当局宋哲元がこうした亡国滅種の条約を受け入れることに断固反対する。われらは北平・天津防衛のため、河北・察哈爾（チャハル）両省の寸上たりとも敵に占領されないため最後まで戦いぬくことを要求する！

全国の同胞諸君！　情勢はこの上もなく緊迫している！　日本帝国主義の大量の陸海空軍が中国に向かって前進しつつある。北平・天津・河北・察哈爾（チャハル）の存亡は危機一髪の瀬戸際に立たされた。われらは日本帝国主義の侵略掠奪に対してこれ以上いかなる譲歩も妥協もできないことを全世界に宣言しなくてはならない！　まさしく蔣介石先生が言われるように、

「今日の北平がもし昔日の瀋陽（奉天）になるとすれば、今日の冀察もまた昔日の東北四省（満洲）となるであろう。北平がまた瀋陽となるならば、南京がまた北平の二の舞いにならぬという理由がどこにあろうか」

問題の核心はまさにここにある！　今日もしわれらが北平・天津を放棄し蘆溝橋・永定河以東の広大な中国領土を放棄するならば、河北・察哈爾両省の防衛不能は必至であり、その結果は必然的に東北四省の二の舞いとなろう。河北・察哈爾両省の防衛ができなければ、華北と全中国はただちに危機に直面、亡国滅種の破局が訪れよう。従ってわれらは、冀察当局宋哲元の日本侵略者に対す

る譲歩と妥協に断固反対しなければならないのである。

全国の同胞諸君！　われらは、宋哲元の屈辱的投降の「既成事実」やいわゆる中日「局地解決」に対して、決して黙認したり弱腰になったりしてはならない。われらは、南京中央政府があらゆる具体的措置を講じ全国人民の希望と要求をみたし、蔣介石先生が七月一七日に宣告された抗日方針（葛西注＝本書二一六頁。蔣介石の廬山演説を指さす）を貫徹することを要求する。今となってはただ単に激越な宣言、不承認声明や抗議だけでは不十分になっている。凶悪な日本帝国主義強盗はそんなもの恐れはしないし、九か国条約調印国の干渉を期待してもそれは徒労であろう。横暴な日本帝国主義強盗はそんなものにかまってはいない。今日われらが必要としているのは、最も現実的な措置で全中国人民の希望と要求の実現を保証し、蔣介石先生の宣告された抗日方針の実行を保証することである。これらの措置は次のようなものでなければならない。

一、冀察当局宋哲元に対し、日本側提起の三条件の遂行を拒否し、二十九軍全軍を率いて武力抵抗するよう直ちに命令すること。もし宋哲元が中央の命令遂行を拒むなら直ちに解任して他の高級将校を派遣し、英雄的な二十九軍将兵および華北各軍を指揮して抗（日）戦を遂行させること。

二、二十九軍に対し大増援部隊を直ちに派遣するとともに、全中国の陸海空軍を動員して抗（日）戦を遂行させること。積極的抵抗の方針でもって日本侵略者の進攻に対処するため、直ちに国防会議を召集して抗（日）戦の軍事指導権を集中し、各戦線における統一指揮を実現すること。抗日主力軍の作戦に呼応するため、日本軍の周辺で広範な遊撃戦を発動し、東北人民革命軍

（葛西注＝この宣言の約一年五か月以前、一九三六・二・二〇『東北抗日連軍統一軍隊建制宣言』により東北人民革命軍の名称は既に廃止されているので、この点は本宣言起草者の明らかな錯誤である）と義勇軍（葛西注＝朝鮮抗日義勇軍のことか）に援助を与えること。

三、直ちに全中国人民に対する総動員を実施し、政党活動を解禁し愛国運動を開放、政治犯釈放、民主的権利の付与、人民生活のさし迫った要望を満たし大規模に民衆を発動組織し、武装せるさまざまな人民の抗日統一戦線をつくり上げること。

四、直ちに全面的な対日抵抗を実施し、対日外交交渉の停止、武力による密貿易取締りを実施して日本製品をボイコットし中国における日本帝国主義のすべての銀行・鉱山・工場・財産を没収。中国における一切の政治的・経済的特権を取り消し、日本大使館・領事館と特務機関のすべてを閉鎖、日本のスパイや漢奸を全部逮捕し、日本侵略者や漢奸の中国におけるすべての武装または非武装の団体を解散させること。

五、直ちに政治機構を改革し中央と地方政府を民主化し、各党各派や人民団体の代表を召集して国民会議や政府に参加させ、国民会議をして真に民選代表の権力機関とし国民政府を真の抗日救国の国防政府たらしめ、政府部内に潜りこんでいるすべての親日派や漢奸どもを一掃する。そうすることによって政府と人民を一致団結させ共に敵に抵抗する。

六、国共両党の親密合作を直ちに実現し、国共両党合作を基盤としてすべての抗日救国党派を団結させ、強固な抗日民族統一戦線をつくり上げ、真に誠意ある団結によって共に国難に赴く方

針を実現すること。

七、国防を強固にし民生を改善するため、財政・経済・土地・労働・文化・教育等の分野で各種の新しい政策を実施すること。

八、抗日の積極外交を直ちに実施し、国際平和陣営を支持、ファッショ侵略陣営に反対し、英米仏ソ等の諸国と抗日救国に有利な各種の協定を結ぶこと。

全国の同胞諸君！　われらの政府と人民がこれらの措置を断固として実施するならば、われらは日本侵略者にうち勝つことが出来、日本侵略者を中国から追いだし、すべての失地を回復できるのである。中華民族の偉大な堅強な力のみが日本帝国主義の進攻を粉砕し、民族の独立・民権の自由・民生の幸福の新中国を樹立し得るのである。

中華民族のすべての子弟たちよ、亡国奴たるを望まぬすべての同胞よ！　この民族存亡の瀬戸際にあたり、がっちり団結し、速かに起ち上がり、わが民族の生命をかけて最後の勝利をかちとろう！

日本侵略者に対する譲歩と妥協に一切反対し、抗戦を最後まで堅持しよう！

断固抗戦のみが中華民族の活路である！

日本帝国主義の新たな攻撃を粉砕、北平・天津・華北を防衛しよう！

日本帝国主義打倒！

中華民族解放万歳！

中国共産党中央委員会

七月二十三日

〔葛西注〕

この宣言と同日、毛沢東は党中央を代表して『抗日救国八大綱領』を発表したが、宋哲元が日本との現地交渉で平和解決をなし『蘆溝橋事件』の火が消えてしまうことは、中国共産党にとって死活問題なのであった。従って華北各地に抗日事件を続発させ、よって日本の大軍を必ず華北に誘致する戦略は中国共産党にとって至上命令であった。

朱徳、彭徳懐が八路軍総指揮、副総指揮就任受諾の通電

『第八路軍総指揮朱徳副総掛揮彭徳懐就職通電』を全訳

一九三七年八月二十五日　発信

南京林（森）主席、蔣（介石）委員長、馮（玉祥）副委員長、各院長・各部長、太原の閻（錫山）副委員長の御高覧を仰ぐ……西安の顧（祝同）主任、蔣（鼎文）代理主任、何（応欽）副主任、孫（蔚如）主席、開封の劉（峙）主任、商（震）主席、成都の劉（湘）主席、南寧の李（宗仁）総司令、白（崇禧）副司令、黄（旭初）主席、広州の余（漢謀）総司令、呉（鉄城）主席、昆明の竜（雲）主

席、長沙の何（鍵）主席、南昌の熊（式輝）主席、漢口の何（成濬）主任、黄（紹竑）主席、福州の陳（儀）主席、済南の韓（復榘）主席、保定の馮（治安）主席、太原の趙（戴文）主席、綏遠の傅（作義）主席、万全の劉（汝明）主席、蘭州の賀（耀祖）主席、寧夏の馬（鴻逵）主席、青海の馬（歩芳）主席、廸化の盛（世才）督弁、各総司令、総指揮、軍長、師長の御披見を仰ぐ

各新聞社、各民衆団体御中

日本侵略者の進攻によって民族は危急にあり、わが軍は敵を倒すために従軍を志願し、義としてもはや後ろにひくことはできない！　幸いにもここに国共両党は再び団結へと進み、断固抗戦せんとの衆人の意思が一体となって城壁のように堅固なものがある。本月二十二日、国民政府軍事委員会蔣（介石）委員長より、とくに朱徳を国民革命軍第八路軍総指揮に、彭徳懐を副総指揮に任命するとの辞令を受けた。このため命を奉じ直ちに紅軍を国民革命軍第八路軍と改めるとともに、われらの就任を宣布する。

現在、部隊は既に編成替えを完了し、敵を倒すために東進中である。われらは至誠を尽くして蔣委員長を擁護し、全国友軍の後ろについて戦場に生命を捧げ、誓って日本侵略者を駆逐し、失地を回復、中国の独立・自由・幸福のために徹底的に奮闘する決意である。電報にて謹んで報告するとともに、何分のご指示を願う。

中華民国国民革命軍第八路軍

総司令　朱　徳

副総司令　彭徳懐

頓首

八月二十五日

〔葛西注〕

強敵は、殺すか、仲間にするか、そのいずれかを選ばなければ味方は安全であり得ない。中国人民抗日紅軍は後者を選んだ。まるで強敵（蔣介石国府軍）のベッドにストリップでもぐりこむに等しい体当たり戦法をやってのけたのである。しかも蘆溝橋で四十六日前（七月七日）に、別な強敵（日本）をおびき出しておきながら、「あの敵は悪いのよ、ね、一緒に打ち殺しましょうよ」という。この妖女、尋常一様の代物ではなく、このベッド・シーンの約五か月半余り前（三月一日）には既に三個師分のベッド代（軍費）をちゃんと前金で蔣介石から受けとっていたといわれているのである。

抗日戦争

編集部

抗日戦争（一九三七年七月～一九四五年九月）は、中国人民が毛主席と中国共産党の指導のもとに、

月刊『人民中国』（北京・人民中国雑誌社発行）

一九七一年九月号79頁より抄録（日文）

さいごの勝利をおさめるまで日本侵略者をむかえうった偉大な戦争である。

一九三七年、日本侵略者は全面的な中国侵略戦争をおこし、中日両国間の矛盾を主要な矛盾にした。そのため、国内的な矛盾は副次的な、従属的なものとなった。この時期に、中国共産党は、独立自主と広はんな統一戦線の結成という方針を堅持し、第二次国共合作を行なった。この時期に、蔣介石国民党反動派は、手をこまねいて勝利を待ち、実力を保存して内戦を準備する、という政策をとった。かれらは、表向きは連合して抗日をするとみせ、かげにまわっては反共の準備をさかんにおしすすめ、統一戦線を破壊し、日本侵略者に降伏しようとした。だが、中国共産党は正しい方針をとり、反共をねらう国民党の陰謀をつぎつぎにうちくだき、抗日戦争を最後までおしすすめた。こうして八年間で、日本侵略者をうち破った。

〔葛西注〕

本書別掲（国府側資料）「難苦な対日抗戦」には、まるっきり逆のことがいわれている。ただ、一致している点は、国共双方とも「七七事変（蘆溝橋事件）は日本の侵略だ」と頭からきめてかかっている点である。

月刊『人民中国』（北京・人民中国雑誌社発行）

一九七一年七月号34頁より抄録（日文）

中国共産党誕生五〇周年を記念して

革命の聖地——延安

袁盛

延安は偉大な指導者毛主席がながい年月にわたって、戦い、生活をされたところであり、中国人民と世界人民のあこがれる革命の聖地である。そびえ立つ宝塔山、さかさまに流れる延河、ずらりとならぶ窰洞（ヨウトン）（葛西注＝洞窟）、そのすべてに、革命闘争をすすめた中国人民の雄々しい事績がきざみつけられている。それには中国共産党のかがやかしい歩みのあとが、マルクス・レーニン主義・毛沢東思想の勝利がかがやいている。

遵義会議のあとで、毛主席がひきいる中国労農赤軍は、二万五千華里（一華里は〇・五キロ）の長征を終え、一九三五年十月、陝西省北部の革命根拠地についた。

毛主席と党中央が陝西省北部の保安（いまの志丹県）から、ここ延安に到着したのは、一九三七年一月七日のことだった。この日、美しく古い町——延安はわきたった。よろこび迎える人びとのなかには、部隊の指揮員・戦闘員、政府機関の幹部、学校の教師、学生、生徒はもとより、町内の老幼男女、それに富県、甘泉などからかけつけた農民代表の姿があった。出迎えの人々は一万を越

えた。延安城の北門から大砭溝まで、数華里にわたり人の列がつづいた。その列の先頭に立ったのは、毛主席の親密な戦友である林彪同志（葛西注＝この雑誌が発売されたとき林彪は、毛主席暗殺を企てた大逆賊として消えていたことが、約二年後の中国共産党第十回全国代表大会――極秘裡に開催された――の政治報告で発表された）とかれのひきいる「抗日軍政大学」の学生たちであった。人びとは、偉大な救いの星――毛主席の到着をまちこがれていた。その毛主席がほほえみながら元気な足どりで、出迎えの人びとのまえに姿をみせた。その瞬間、ドラが太鼓が爆竹がいっせいに鳴りひびいた。

「毛主席万歳！」

「中国共産党万歳！」

歓声と拍手が谷間をゆるがし、大空にこだました。

この日から延安の鳳凰山麓、楊家嶺、棗園（ソウエン）、王家坪の窰洞にともる灯は夜の明けるまでともりつづけた。毛主席は、プロレタリア革命家としてのすぐれた才能と革命的気概を発揮して、大著をつぎつぎにあらわし、みずから党のために一連の理論と路線、方針、政策を確定していった。こうして、延安は中国革命の指導の中心、中国人民解放闘争の兵站基地となったのである。」

抗日戦争の指導の中心

一九三一年、日本帝国主義は「九・一八」事件（葛西注＝満洲事変）をおこして、中国の東北地方を不法にも占領した。ついで華北地方を侵略し、中国をその植民地にしようとした。大挙して攻め

よせる日本侵略者をまえにして、国民党反動派は抵抗しない政策をとった。そのため、広大な国土は敵にうばわれ、中華民族は存亡の危機に直面した。

「内戦をやめて、一致して日本侵略者とたたかおう」

これが全中国人民のさし迫った願いであった。

この重大なときに、毛主席は、民族解放の大旗をたかくかかげ、抗日民族統一戦線結成という政治路線を提起した。一九三五年十二月二十五日、毛主席は瓦窰堡（葛西注＝陝西省北部子長県の一村落）で党中央政治局会議をひらき、抗日民族統一戦線結成についての政策を討議、採択した。二十七日には、党の活動家会議で、毛主席は「日本帝国主義に反対する戦術について」と題する報告をおこなった。この報告は、抗日民族統一戦線を結成するうえでの理論的基礎となった。（以下略）

〔葛西注〕

この翌年、つまり満一年後に『西安事件』が発生し、さらに約七か月後には『蘆溝橋事件』勃発と続いた。蔣介石中華民国政府による第六次共産匪勦滅戦の最後の総攻撃を見事にかわし、そのうえ敵（蔣介石）を敵（日本）と戦わせることに成功した中国共産党の大戦略は驚嘆に値しよう。

『毛沢東軍事論文選』（北京・外文出版社刊）209頁より抄録（日文）

抗日戦争の戦略問題

抗日戦争の初期には、遊撃戦争の重大な戦略的役割を軽視し、正規戦争、とくに国民党軍隊の戦いにだけ希望をかけているものが、党内にも党外にもたくさんいた。毛沢東同志はこのような観点を論駁（ばく）すると同時に、この論文を書いて、抗日遊撃戦争の発展の正しい道をさししめした。その結果、抗日の期間中、一九三七年にはわずか四万余人しかいなかった八路軍と新四軍は、一九四五年の日本の降伏のときまでに百万の大軍に発展し、たくさんの革命根拠地を創設して、抗日戦争のなかで偉大な役割をはたした。そのため、抗日の期間中、蔣介石は日本に投降することも全国的規模の内戦を引きおこすこともできなくなり、一九四六年蔣介石が全国的規模の内戦を引きおこしたときには、八路軍と新四軍によって編成された人民解放軍は、その進攻にたちむかう力をもつまでになっていた。

〔葛西注〕

右の編者前書は棒読みすると「なるほど」と思われるが、目をつむって考えなおしてみると、中国共産党の頭脳が一筋縄でいけるものではないことがよくわかる。

つまり日中戦争の誘致（蘆溝橋事件）に成功した中国共産党は、トラの子である中国人民抗日紅軍四万余人をことごとく蔣介石軍事委員長に捨て子し、ソビエト区を解消したとみせかけ、まんまと中華民国国民政府を欺き、その裏ではせっせと革命根拠地（即ちソビエト区）を創設していた、というのである。また、そのためには抗日遊撃戦争という名の領土拡張作戦をねばり強く続けた、と自白しているのである。

八路軍、新四軍が実は中国共産党指揮下の軍隊ではなく、中華民国国軍の陸軍部隊であったことは本書別掲の関係資料に明らかなので、ここでは繰り返さない。しかし、右の編者前書は不用意に棒読みすると、八路軍、新四軍という他人にくれてやった子がその後も中国共産党の家のなかにいたように錯覚させられる。ウソも上手につかれると大ていの人間は真実と勘違いしてしまうのだ。

第一章　なぜ遊撃戦争の戦略問題を提起するのか（本章全略）

第二章　戦争の基本原則は自己を保存し敵を消滅することである

遊撃戦争の戦略問題を具体的にのべるまえに、戦争の基本問題についてのべなければならない。

あらゆる軍事行動の指導原則は、できるかぎり自己の力を保存し、敵の力を消滅するという基本原因にもとづいている。この原則は、革命戦争においては基本的な政治原則と直接につながっている。たとえば、中国の抗日戦争の基本的政治原則、すなわち政治目的は、日本軍国主義を駆逐し、独立、自由、幸福の新中国を樹立することである。それを軍事の面で実行すれば、軍事力で祖国を防衛し、日本侵略者を駆逐するということになる。この目的を達するため、軍隊自身としては、一

方では自己の力をできるかぎり保存し、他方では敵の力をできるかぎり消滅するという行動をとる。（以下略）

第三章　抗日遊撃戦争の六つの具体的戦略問題

ここで、自己を保存し、敵を消滅するという目的をたっするには、抗日遊撃戦争の軍事行動で、どんな方針あるいは原則をとらなければならないかをみることにしよう。抗日戦争（ひいては、あらゆる革命戦争）の遊撃隊は、一般に無から有、小から大にと発展するものであるから、自己を保存することのほかに、もう一つ自己を発展させるということがつけくわえられなければならない。したがって問題は、自己を保存または発展させ、敵を消滅するという目的をたっするには、どんな方針あるいは原則をとらなければならないかということである。

まとめていえば、主要な方針としてつぎの各項目がある。（一）防御戦中の進攻戦、持久戦中の速決戦、内線作戦中の外線作戦の主動的、弾力的、計画的実行。（二）正規戦争との呼応。（三）根拠地の樹立。（四）戦略的防御と戦略的進攻。（五）運動戦への発展。（六）正しい指揮関係。この六項目は抗日遊撃戦争の全般的な戦略綱領であり、自己を保存し発展させ、敵を消滅し駆逐し、正規戦争と呼応して、最後の勝利をたたかいとるための必要な道である。

第四章　防御戦中の進攻戦、持久戦中の速決戦、内線作戦中の外線作戦の主動的、弾力的、計画的実行（本章全略）

第五章　正規戦争との呼応（本章全略）

第八章　根拠地の樹立

抗日遊撃戦争の戦略問題の第三の問題は、根拠地樹立の問題である。（中略）

遊撃戦争の根拠地とは何か。それは、遊撃戦争が自己の戦略的任務を逐行し、自己の保存と拡大（葛西注＝中国共産党の保存とソビエト区の拡大を意味するもの）、敵の消滅と駆逐という目的をたっするための戦略的基地である。このような戦略的基地がなければ、あらゆる戦略的任務の逐行と戦争目的の達成はよりどころをうしなってしまう。（以下略）

第一節　いくつかの種類の根拠地

抗日遊撃戦争の根拠地は、だいたい、山岳地帯、平原地帯および河川・湖沼・港湾・川股（かわまた）（葛西注＝日本でいう三角洲のことか）地帯の三つの種類をでない。

山岳地帯での根拠地の樹立が有利なことは、だれにもあきらかであり、長白山、五台山、太行山、泰山、燕山、茅山などで、すぐにつくられるか、いまつくられつつあるか、これからつくられようとしている根拠地が、それである。これらの根拠地は、抗日遊撃戦争をもっとも長期間もちこたえていける場所であり、抗日戦争の重要なとりでである。われわれは、敵の後方にあるすべての山岳地帯にいって遊撃戦をくりひろげるとともに、根拠地をうちたてなければならない。

〔葛西注〕

この論文発表の十か月前、すなわち蘆溝橋事件の翌日に発した毛沢東ら七名連署の宋哲元宛通電では「紅軍将兵は日本侵略者と決戦を交えんとしている」（本書一六〇頁）と大言壮語して二十九軍宋哲元を煽り、また同年七月四日の中共中央『国共合作を公布するについての宣言』では「抗日の前線における職責を担う」と明言（本書一六六頁）しているが、その舌の根も乾かぬうちにぐるり一転、この論文では「抗日の前戦で決戦」なる文字は消えてしまい、「抗日の後方で根拠地（ソビエト区。後の解放区）をつくれ」と論じているが、これは毛の本心があくまでも赤色革命成功のためには『日中戦争』が必要不可欠の要件であったにすぎなかったことを証明するものである。

平原地帯が山岳地帯よりいくらかおとることはもちろんだが、決して遊撃戦争をくりひろげることができないわけではないし、またどんな根拠地もつくれないというのでもない。河北省の平原、山東省の北部と西北部の平原では、すでに広い地域にわたって遊撃戦争をくりひろげており、これは平原地帯で遊撃戦争をくりひろげることができる証拠である。平原地帯でも、長時間もちこたえられる根拠地を樹立することができるかどうかは、現在のところ、まだ証明されていない。ただ臨時的な根拠地の樹立、小部隊の根拠地または季節的な根拠地の樹立については、前者は現在すでに証明されているが、後者も可能だというべきである。なぜなら、一方では、敵は配置する兵力に不足し、また、かつてない野蛮な政策を実行しているということ、他方では、中国には広大な土地があり、また抗日の人民がたくさんいるということ、これらのことが平原地帯に遊撃戦争をくりひろげ、また臨時の根拠地をうちたてることのできる客観的な条件をあたえている。もしそのうえに、

指揮の適切という条件がくわわれば、小部隊の、固定しない、長期の根拠地をうちたてることも当然可能だというべきである。だいたい、敵がその戦略的進攻を終わり、占領地の保持の段階にうつってくると、遊撃戦争のすべての根拠地にたいする残酷な進攻がはじまるのは疑いのないことで、平原の遊撃根拠地は、おのずから、まっさきにその矢面にたたされる。そうしたとき、平原地帯で活動している大きな遊撃兵団は、もとのところで長期間作戦をもちこたえることができなくなり、状況に応じて、だんだん山岳地帯に転移していかなければならない。たとえば、河北平原から五台山と太行山に転移し、山東平原から泰山と膠東半島に転移するというようにする。だが、多くの小さな遊撃部隊を保持し、それらを広大な平原の各県に分散させて、流動作戦の方法、つまりときにはこちら、ときにはあちらという根拠地引っ越しの方法をとることは、民族戦争（傍点は葛西）という条件のもとでは、可能性がないといえない。（以下略）

〔葛西注〕

民族戦争なる語が登場したが、これは従来中国共産党が頻繁に使用してきた『民族革命戦争』とも『抗日民族革命戦争』とも異質なもので、無論ミス・プリントではない。民族戦争の意味は、当時の状況からして日本軍占領地域内にできた親日政権、それに国共合作はしたものの油断は大敵といった蔣介石国府軍等との戦争をも指さすものとみられる。

『毛沢東軍事論文選』（北京・外文出版社刊）259頁より抄録（日文）

持久戦について

これは、毛沢東同志が一九三八年五月二十六日から六月三日にかけて、延安の抗日戦争研究会でおこなった講演である。

（六三）「戦争は政治の継続である」この点からいえば、戦争とは政治であり、戦争そのものが政治的性質をもった行動であって、昔から政治性をおびない戦争はなかった。抗日戦争は全民族の革命戦争であり、その勝利は、日本帝国主義を駆逐し、自由平等の新中国を樹立する（葛西注＝日本帝国主義が中国大陸から駆逐されて既に三十年ほどになるが、自由平等の新中国なるものは果たして実現したであろうか）という戦争の政治目的からきりはなせないし、抗戦の堅持と統一戦線の堅持という全般的方針からも、全国人民の動員ということからも、将兵の一致、軍民の一致、敵軍の瓦解などの政治原則からも、統一戦線のりっぱな逐行ということからも、文化面での動員ということからも、国際勢力と敵国人民の援助をかちとる努力からもきりはなすことはできない。一言でいえば、戦争は片時も政治からきりはなせないものである。抗日軍人のなかに、もし、戦争を孤立させて、戦争

絶対主義者になるような政治軽視の傾向であるなら、それはあやまりであり、是正すべきである。

（六四）だが、戦争にはその特殊性がある。この点からいえば、戦争がそのまま政治一般ではない。「戦争は別の手段による政治の継続である」政治が一定段階にまで発展し、もうこれまでどおりには前進できなくなると、政治の途上によこたわる障害を一掃するために戦争が勃発する。たとえば、中国の半独立の地位が、日本帝国主義の政治的発展の障害となり、日本はそれを一掃しようとして、侵略戦争をおこした。中国はどうか。帝国主義の抑圧がはやくから中国のブルジョア民主主義革命の障害となっていたので、この障害を一掃するため、いくどとなく解放戦争がおこった。いま日本が戦争による抑圧で中国革命の進路を完全に断とうとしているので、われわれはこの障害を一掃しようと決意して抗日戦争をおこなわざるをえなくなっている。障害が一掃され、政治目的が達成されると、戦争は終わる。障害がすっかり一掃されないうちは、目的をつらぬくために、戦争は依然として継続されるべきである。たとえば抗日の任務がまだ終わらないのに、妥協を求めようとしても、決して成功しはしない。なぜなら、たとえなんらかの理由で妥協したとしても、広範な人民は決して承服せず、必ず戦争を継続して戦争の政治目的を貫こうとするから、戦争はまたおこるのである。従って、政治は血を流さない戦争であり、戦争は血を流す政治であるといえる。

〔葛西注〕

ここでも毛は「対日妥協はだめである」と繰りかえしている。中国共産党にとって『日中戦争』こそ唯一無二の救世主であったからだ。

（六七）政治的動員とは、何か。それは、第一に、戦争の政治目的を軍隊と人民におしえることである。兵士と人民の一人ひとりに、なぜ戦わなければならないか、戦争はかれらとどんな関係があるかをぜひわからせることである。抗日戦争の政治目的は「日本帝国主義を駆逐し、自由平等の新中国を樹立する」ことである。この目的をすべての軍人や人民におしえなければ、数億の人民が心を一つにして戦争にすべてをささげるよう、抗日の波を大きくもりあげることはできない。（中略）第三に、どのようにして動員するのか。口頭、ビラや布告、新聞や書籍、演劇や映画、学校、民衆団体、幹部をつうじて動員するのである。いま国民党支配地区で、いくらかおこなわれているが、大海の一滴のようなもので、方法も民衆のはだにあわず、態度も民衆からかけはなれており、これは確実に改めなければならない。第四に、抗日戦争のための政治的動員は恒常的なものであって一回で十分というものではない。これは政治綱領を暗唱して民衆に聞かせることではないし、そんな暗唱はだれも聞くものではない。戦争の発展の情況に結びつけ、兵士と民衆の生活に結びつけて、戦争のための政治的動員を恒常的な運動にしなければならない。これはきわめてたいせつなことで、戦争の勝利はなによりもまずこのことにかかっている。

（八三）錯覚と不意のために、優勢と主動をうしなうことがある。したがって、計画的に敵に錯覚をおこさせ、不意うちをかけることは、優勢をつくりあげ、主動をうばいとる方法であり、しかも重要な方法である。錯覚とは何か。「八公山の草木みな兵なり」というのは錯覚の一例である。「東を撃つとみせて西を撃つ」というのは、敵に錯覚をおこさせる一つの方法である。情報がもれるの

を防げるような、すぐれた民衆的基盤があるばあい、敵をあざむくいろいろな方法をとれば、しばしば効果的に、判断をあやまり行動をあやまるような苦境に敵をおとしいれ、これによって敵の優勢と主動をうしなわせることができる。「兵法は偽りをいとわず」というのは、このことをさすのである。（中略）戦争のすべての必要を無限にみたすには、断固として、ひろく、全民衆を立ちあがらせる以外にはない。このことは、敵に錯覚をおこさせ、敵の不意をついてこれにうち勝つというこの戦法においても、きっと大きな役割をはたすことになる。われわれは宋の襄公ではなく、かれのようなばかげた仁義道徳を必要としない。（宋の襄公は西紀前七世紀の春秋時代の宋国の君主である。西紀前六三八年、宋国は強大な楚国と戦った。宋兵はすでに列を組んで陣をしき、楚兵はちょうど河を渡るところであった。宋国のある役人は、楚兵は多く、宋兵は少ないとみて、楚兵の渡河が終わらない幾会をとらえて撃ってでるよう主張した。しかし、宋の襄公は「それはいけない。君子は他人がこまっているのに乗じて人を撃つようなことはしない」といった。楚兵が河を渡って、まだ兵の布陣が終わらないとき、宋の役人が撃ってでるよう再び願いでた。宋の襄公はまたも「それはいけない。君子は陣営をととのえていない隊伍を攻撃するようなことはしない」といった。楚兵がすっかり準備ができたとき、はじめて宋の襄公は出撃命令をくだした。その結果、宋国は大敗し、宋の襄公自身も負傷した。この物語は『左伝』僖公二十二年にみられる）自己の勝利をかちとるためには、われわれは、敵の目と耳とをできるだけ封じて、これらを盲とつんぼにし、敵の指揮者の頭をできるだけ混乱させて、これらを気狂いにしてしまわなければならない。これらのこともすべて、主動または受動と主観の指導とのあいだの相互関係である。日本に勝利するにはこうした主観の指導は欠くことのできないものである。

〔葛西注〕

ここでは毛は「敵に情けをかけるな。かければ自分がやられる」と力説。また、敵を欺くことは兵法の常である、と強調している。敵とは、いうまでもなく日本のことであるが、本論文全体からみると明らかに蔣介石国府も含まれている。

〔訳注〕（北京＝本論文訳者の訳注）

一九三七年九月二十五日、中国共産党の指導する八路軍第一一五師団は、林彪同志みずからの指揮の下に、山西省の平型関地区で、全国的抗戦いらい最初の殲滅戦をおこない、日本軍の精鋭部隊板垣師団三千余名を殲滅した。この勝利は国内外を震憾し、全国軍民の抗戦必勝の信念を大いに鼓舞し、中国人民の抗日戦争史に輝かしい一ページをしるした。

〔葛西注〕

この訳注には公然と虚偽の事実が述べられている。即ち「中国共産党の指導する八路軍第一一五師団」なる部隊は終始実在しておらず「中華民国陸軍第八路軍第一一五師（師長林彪）」が蔣介石軍事委員長統轄下の中華民国国民革命軍という国軍の一部隊として実在したことは、本書別掲の中国共産党自身の記録によって明らかだからである。また「山西省の平型関地区で、全国的抗戦いらい最初の殲滅戦をおこない、日本軍の精鋭部隊板垣師団三千余名を殲滅した（八路軍一一五師が）」という件も事実と大きく相違している。事実は、山西省一帯を所管する第二戦区（軍管区。司令長官閻錫山）に編入され八路軍から『第十八集団軍（総司令朱徳、副総司令彭徳懐）と改称された三個師のなかの一個師が『第一一五師』（師長林彪）であり、問題の平型関で皇軍の精鋭第五師団（師団長板垣征四郎）と九月二十二日から三十日までの九日間にわたり激しい戦闘を交えた末に退却したのは、無論のこと第一一五師だけではなく、同じ第十八

集団軍の第一五軍（軍長劉茂恩）と第十七軍（軍長高柱滋）の六個師が主力であった。なお、第一一五師に殲滅された（?）板垣の第五師団は、砲兵一個中隊を含む歩兵三個大隊（歩兵第十一連隊第一大隊、同第二十一連隊第三大隊、第四十二連隊第二大隊）と新庄中佐の輜重（自動車）部隊等約三千名だけで、第一一五師を含む中国軍七個師約十万名と激戦の末ついに敵を五台山方面に敗走せしめ、平型関を占領したのである。以上が、毛沢東軍事論文選（持久戦について）の訳注にある虚偽の事実に対する分析結果である。